

脩心
女道乃志
了局

大書
館

川田

第

號

第

卷

出 不外館

□ 9

4051



門口 4051 巻



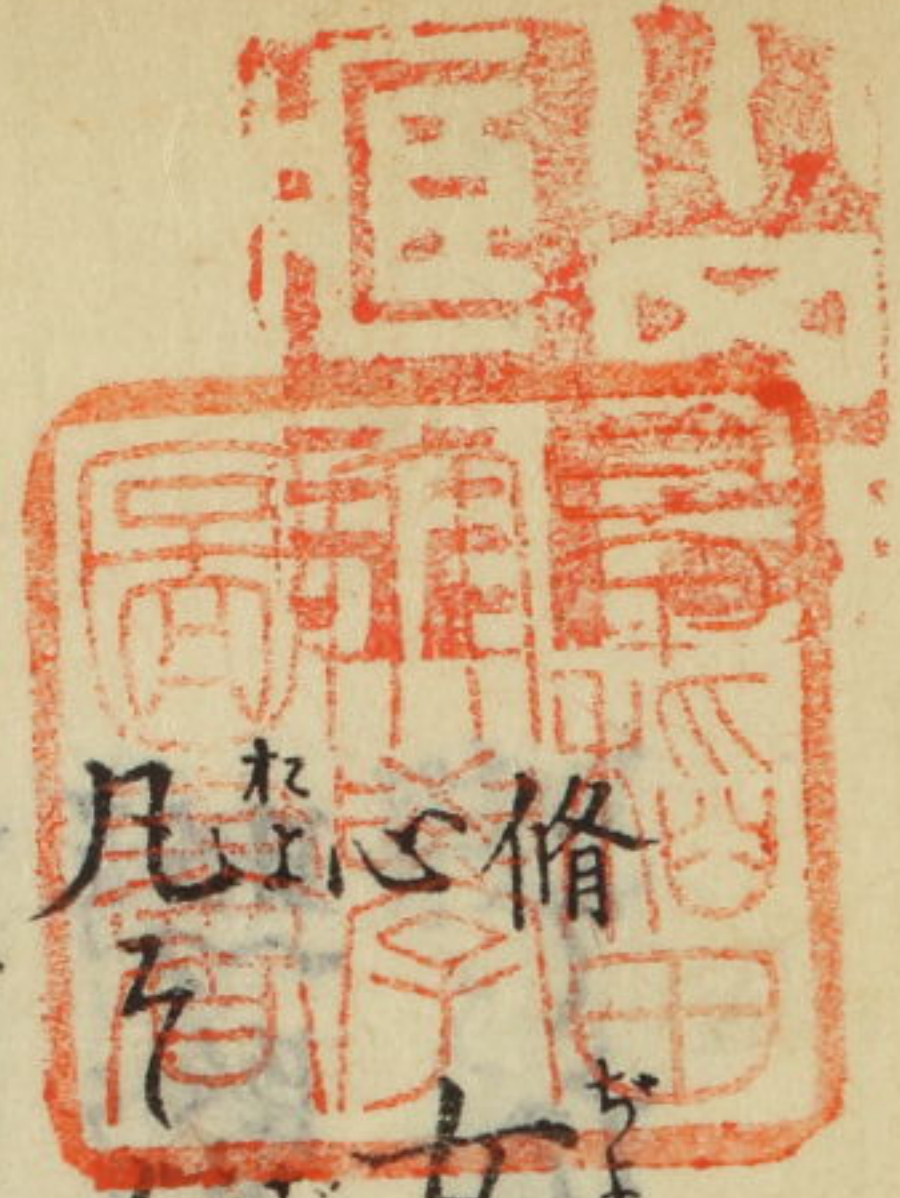
昭和十三年
十月廿六日
東京
十日書局

覺著

心女道乃志る處

明治十五年 著者藏版 八月出版

昭和十三年十月十九日
兼藤榮氏贈



凡心脩女道乃志る處
女道乃志る處
女道を終ふはまの天地



の神乃理をたのか心よよくとめて
恐れ志こみ聊も働よたの
はやる人の誠の一筋よひのめる
志をい退けく廉をの徳を取

竹内無覺著

脩心 女道乃志る處

明治十五年 八月出版 著者藏版

昭和三年十月十九日 兼藤榮氏贈

門 9
號 4051
卷



脩心 女道の志る處
凡そ女道を終ふはまの天地



の神乃理をたのか心よよくとめて
恐れおの志こみ聊も働よたの
はやる人の誠の一筋よひのめる
志をい退けく廉志の徳を取

つよくよ抑神を陽の靈又祇といふ
を陰の靈則二靈をおわして天地
人間萬物を化育一たまふ元と
なる是を鬼神の徳といひを
照覧の不可思議を神明とこ
ろたへぬれさきは貴とさく

賤となしき世界の國位此の誰
のは彰る恩徳を身に蒙る
ぬ者となす天地人道一なれを
男の陽にして天の理を女の陰よ
志く地の理ふり天地陰陽交りて
たのばぬ何一千早振神代の

遠き昔より今年このとの今いまに至る
まろく変る事ことなく物ものを
めくみ事ことを給ふたまころ是れ仁に
なれ又義またぎなり人ひとも仁義にぎを
旨あねとくかこ上かこを父母ふぼ主ち丈夫ふぢ兄あに長ちやうよ
孝婦忠信かうふちゆうちん貞節ていせつを尽つく志こころて是これよ

能よくつつのの下しもににもも子こ従したが婦ふ弟ていより幼い
たなきををは愛あい播はつつ明あ友ともを
互たがひ小こ信しん実じつをを篤あつく守まもりて交まじは
るを終始安堵しゆうしやうあんどうの道みちとなす天てん
理り人じん道どう暗昧あんまいよよ正せい邪じゃ善ぜん惡あくの別わか
ちさへ判然せんぜん明あきらかかああららせせれれを

終つひに邪よこしま悪あくの横道よこみちに迷まよを入いてハ
素直すなはなる人ひと乃道みちよは出いかド
やあきハ道みちハ須臾しゆゑんも離はなれそ
ゆかんすべろなき
夫それ天地人ちんちどんの三才さんさいと盡よまいふことを
誰たれよても知るとは心こころと天地あめつち乃

ふたつをヤハも限かぎりなく廣大くわうだいなる
るまの身みは更さらに賤然せんぜんたるを
こしてまを位ゐをバ同おな一いつニ才さいとたのらべ
稱たよせらるる其理そのことばりを思おもひをみよ
凡たよそ天地てんちの働そとらハ四時しじの流行りゅう絶間たえまあ
く風雨霜露ふううそうろの惠めぐみこそていこのな

る汚穢けくわいも隔へたてふく普あまねく照てら志
養やしなえてよく生うを遂と一いつむる
されども天てんの生せいをまつるの
なまじと地ちの心こころを受持うけもちてよく
一物いちぶつをも漏もらすなく育やて養食やしなひ
聊いささも天てんの心こころよたのふなく是これをすべし

無量むりやうなる天地てんち和合わがふの道みちよして
を理り廣大くわうたいなる故ゆゑに形かたちをしれと
みこねとも神かみを天地てんちに充満ちゆうまんし
常につねにまらぬ隈くまもなく萬物ばんぶつも
事ことを主宰しゆさい志しる日夜にちやの保ほ護ご
をたれぬまふ故ゆゑに天地てんちの心こころを

をさすちかみ
幻神の心ふり今人ふりて廣
大の天地とせよ並立ち靈なる故
は他よあらざりそよ物と産
たまふ神の恵のぬるるをそ
まおのか心とす是を名つけ
仁と云ふ仁とは人の上よのみ天より

配授なりたまふ性の徳と云ふ
そのにそ禮義智信の元まころ
されども人のならひとそ片ま
かちの喜や怒や哀しみ
める愛する悪を欲はるの七つ
の情を見聞する事にも動く

このなるをさふまふく終へを
かたらず人の身の徳を失ふ元
とこのりみて是を程よく用む
を仁の心よのなふべし夫仁の理ハ
愛くを主とする故は天地の生
の理を助くるが人の誠の道から

むいに天地の大あるも人の力よ
能れハ米かきことあまたあり
先づそを養ていは五穀の
炎き物よても生ぜしまよ換
杞のは突り粟くもとあらず
必らず人の力をば待て生を

道也されハ物み亦相共ニ助け
たすけて用をたす故ニ妻ハ婦
を恵ミ妻ハ夫ニ聊もたのふる
なく和睦して子孫を養育する
故ニ子もまた自然父母の力を助
孝養を尽して是ニ報ふべ

ハ

新ありてころ天地人ニ其の理に
かなふ故そノの聖も孝をもて
是をば徳の本となすたとへば
夫婦ハ一輛の車にふたつの輪の
如く相待て後を金ふすま
そのなれハ孰きを夫ニ孰きを

をこの^い結^や志^んん^ずび^まい^その^あら^ず
心^こあ^をせ^ての^たよ^りの^なま^きを
ま^まの^道と^いふ^申そ
か^こま^き事^なの^ら人^の皇^のを
初^は代^のよ
神^む武^{てん}天^の皇^のの^ら后^{ごう}は^いず^き余^{より}理^り

姫^{ひめ}の^まと^て貞^{てい}操^{そう}正^{せい}志^しく^まし^て
志^しの^を我^わ国^{こく}政^{せい}道^{だう}の^たま^はし^て
た^まま^して^ら其^{その}後^{のち}
神^{かみ}切^{きり}后^{ごう}は
仲^{ちゆう}哀^{あい}天^{てん}皇^{かう}崩^{ほう}御^ぎの^ち後^{のち}御^ご妊^{にん}娠^{しん}よ^ては
く^たれ^と好^よ機^き會^{かい}を^はは^つと^と

新羅百濟高麗を御親ら
御征討皇國の武威を外國へ
示したまひし御事蹟
今も傳へしそも高く婦女の鏡
と仰ぐあり其外貞女勇婦
とて名の著れさへ多のりき

わけてわがすむねはやまとみづほ
分てふ巨大神の國ハ天照
らす大御女神に始まるとか
ぬ道を掛巻も畏き神聖の御代
知す時より百數十代皇統爰に
連綿と天津日嗣の絶間なく
君と臣との道たちて正志きくる

万邦ばんぱうは比類ひるいあらせぬ最上さいじやうの位み
國くにのうつくしくするたふてげきことよ自ま
國くにをわれひと人の重く愛する故ゆゑよ
そまそのいし古よさこののぼりとふもか志
こきひめ姫神がこの控たまへる御教みよ
かるとめ乃有とちりらば女をとんなの

道みちもたちぬべし
然しかるよをちかき古より下まを押おへる
悪弊あくへいよて女ハ男をとんなに及およぶぬゆゑ
國くによ報むくゆるちからかなしといひのめるん
の根ねとなりつ女道ぢやうの学まなびも
怠たりて義ぎ勇むを失うひ只ただ復またに

形容をのみ粧して糸とり續
ぎ織縫の女工の事ハ後また
一果を遊惰に陥りて女の嗜
なき故よ男子も女子に對す
るの惠の情をうすくして
唯容をのみ淫を遊戯

よ耽る迷ひより倭女邪智の
業ハも穢に乘てさかいらよ
善を遠とけ悪と奉けおの
のまに家國を乱せし御志
多かるる容人よ怒るべき事か
らすや

女の行を重けれハ男子もお
乃づと愛憐の誅いやます又
より励む心も深くあり士農
工商夫もよそ職業に急らて
國よ産する物品八日にま一月
よかをりて是富國と成るや

若又女の心ばえはま一けれを
それのため男の心もあ一くあり
外の勢もいア一かと急り勝よ
成もせばこれのれ獨の罪のみこの
皇國一對一て大衆の令不とそ
にも控られん天とか一つき仰

べき丈夫のんよ聊も省このぬ婦ハ
地の理なる柔和の二孝を朝夕
よれのこの心乃鑑みとて嫉妬の
心起すまゝ一丈夫過ちある時を
後暇なるをと音とつ新も詞
も和らげと静に練め止むべ

凡々思も中にあれは色面よ
歌はるる怒の節一ありな
からまたきよ是を捨たれそ
敷して粗暴をたす故よん
えす聞えす取ふきやみを深
くこのへりみハ獨を信一む

穢けがれよかなひく内外清浄きんじやうの安やす
けき身みともたなりぬべし
殊ことよ女をんふを子を産うて家の血統ちすけい
を全ますする大事だいじの努つとめあ
る故ゆゑよ懐妊はらする時ときハ身みを軽かろく立たち
居起ゐ所飲た食きよ心こころを用もちを情じやう

一いつて悪志あくしき、友ともにを交まらさ
よのらぬることを見聞みきせずみの
運動うんどうを程ほどよくし心こころ正ただしく保たも
ちなば産さんものふらす易やすく
りてふもたのつゝ健康けんかうよ
智恵ちゑて一衆いちしゆよ勝まさるぞこの

まいてそこの生を多く
月日母親乃手一ほよかくるも
のなれハお為す事ハ子の鑑
乃行むのりれ乃み心の
契のよーあーもいつか福り
知らぬまよ常の習いとなる

このぞせ乃養は傳ふふるこつ
子乃魂百までもかはらぬ例
先入の主となることぞ怒るべき
爰よ天然ろふをれる身の新
のきざーにを小女の遊をよま
事として物の調理の仕方より

又また殿とのさまた突たさままとてと夫婦ふうふ
正ただしくく睦むつ志しくく婢ひよよをを采さいららぎ
急い怒ぬ深ふかくく婢ひもも亦また主まをを采さいて
身みをを采さい火ひよよ能よくつつののへへ又また人ひと形かたちを
背せよよ負ねをを抱いだつつすすかか一ひとつつ居ゐ揺ゆり
つつ寐ねのの一ひとつつけけつつ或あるははまたまた尿ちり

屎しささせるせる仕あ方かたよりより穢けがれれ一ひとむむつ
ききののああててのの一ひとままててそそのうはう便べんのの密みつ
ななるるハハいいささででもも一ひとるるまま母は親たやのの
赤あか子ごをを愛あい育いくすす情なさけよよ子こををでで
かかなな子こ有ありささままはは天てんのの命めいずずるる
憂うれふふりり

叔^{きと}年^{とし}月^{つき}のあ——さやく^{そのこむ}子^こと
とせよ^{なり}朱^{あま}ぬれハ^よ結^{むす}き師^しを^を擗^{えら}む
從^{おゆ}ま^かせ^{ふた}あ親^{おや}は^{その}トめ^めも^し師^しよ
も^{もつ}あ^はら^{けい}敷^{れい}屋^つさせ^つ志^ののみ
ならず^{あま}す^{ゆふ}朝^あ夕^{ゆふ}に^{わが}家^た行^{こな}むを^{かへ}顧^{かへ}
り^{わが}み^こて^もす^{そむ}べ^とく^も我^{わが}子^この^も擗^{そむ}氣^{そむ}とも

な^わる^らべ^らぎ^らや^らう^らを^ら思^{おも}ふ^らべ^ら——も^ら志^ら
子^こに^あ過^{あや}ち^まあ^まれ^まむ^まと^まて^ま怒^{いか}り^を
起^たし^たを^の志^また^のふ^まく^ま罵^のり^ま責^せる^まる^ま事^{こと}
あ^あの^あれ^あい^あか^あよ^あを^あさ^あな^あき^あ心^{こころ}よ^あも^あ
餘^{あま}りに^あ苛^あ酷^あき^あ拳^あ動^あを^あ恨^あむ
も^あた^あよ^あは^あ父^あ母^あよ^あ遂^あふ^あ心^あを^あ起^あす

ぞがーヤリとて愛あいのみねほ溺ほき
好このめるままくに任まかせななばか必かならずああ志
ききふらはーのみ牙みをもも害あるあえ
とななるか斯かあるあ時ときハ物ものの理りをこ心こころ
静あつかよよととききわわけけくくそそああややままち
をを論ざとすすこころろぬぬたたるるものもの職しやく務む

なれ

かかること理はりあるあ故ゆゑはは是これをを男だん
女おんな同どう権けんととはは貴たかくくももいいふふたたるるをを
少すくししのの業わざははおお務むりり我われもも男だん子し
はは勞れららぬぬ故ゆゑ同どう権けんななりりとと誤あやままるる
ののたたををららいいたたきき事ことののみみのの

實ガよをろかたることのなりと
多おほくのいこ人乃あふより侮うへを受うることこところ
安やすのをなごらねすべし女子みめはみめ足目あしめより
そかたはら心こころをたすよくたす備たすめ内うちのつとめ務つとめを
怠たらずつね常つねにけい敬あいこく神まこと皇まこと愛あひこく國まことのまこと誅
ころをみ磨あきつててん天うら理むん人どう道あま明あまらめて

政府せいふのねぎて控よをまもりまもるを志し
つきつのつねふつねまつねもつね常つねにた他た國こくのあふ侮うへ
りうけを受うさせんざるせんやいちいち女むすめたり
ともどう回くわい心しん一いつ皇みかど國くにのためためためよみ身みを
捨すてちちかからら限かぎりつをつららめめや

皇統十月廿七日

明治十五年八月二十八日版権免許

著者兼出版人

東京牛込區神樂町

二丁目廿二番地

竹内無覺



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '海', '島', 'の', '記', '述']

牛込若町三十七番地

川田系

川田系